

キタキツネのキキ

3

作 なかむら よしひろ

おうちに帰ると二二が

「お兄ちゃん、どこに行つてたの」と言いながら鼻を近づけてきました。

すると「あれ、お兄ちゃん、なにかいいにおいがする」と言いました。

「うん、外で遊んでいたら人間の女の子がくれたんだ、食べてみたらものすごくおいしかった」

「お母さんのおっぱいより？」

「うん、ずっと甘かった」

「ほんとう、それなら二二も食べてみたい」

「じゃあ、また外に出てみようか」

「でも、お母さんにしかられるわ、人間に食べ物なんかもらっちゃ」

「ぼくたちも、もう子どもじゃないんだからいつまでもお母さんのお乳ばかり飲んでいられないよ、自分で探さなくっちゃ」

こうして2匹はおうちから外に出て、道路のわきに並んで座りました。その日は天気の良い日曜日だったの

で湖に遊びに来た観光客の自動車がたくさん通りました。ほどなく子どもを2人乗せた自動車がキキと二二の前に止まりました。窓が開いて、

中から小さな男の子が顔を出し、

「ママ、この狐たち、逃げないよ」

大きな声で言いました。すると別の窓から小さな女の子と大人の女の子が顔を出しました。

「ほんとうね、可愛いわ」と女の子。

「これ狐なの、犬みたい」と女の子。

「犬じゃないの、キタキツネっていうのよ」

男の子の顔が窓から一度消えたかと思つと、また顔を出し同時になにかを投げました。それはキキの鼻先に落ちました。ドーナツとは違うほのかな甘みにおいがしました。それは

チョコレートでした。キキがためらいがちに口に入れてみると、とろりととけ口の中が甘さでいっぱいになりました。男の子が大きな声で、

「ママ、この狐、チョコレート食べるよ」そう言いながら今度は二二の

前にもチョコレートを投げました。キキが食べるのを見ていた二二はそれをすぐに食べました。あつという

間にチョコをたிரらげた2匹はまた窓を見上げました。すると今度は女の子がミカンを投げてくれました。それはちよつとすっぱかったけれど、とてもおいしかったのです。そ

のとき、別の車がやってきてクラクションを鳴らしたので、その子どもたちを乗せた車はあわてて行ってしまいました。

それから毎日キキと二二は道路わきに座つて自動車が止まるのを待ちました。そして人間からいるいるなものももらい、人間のお菓子をいっぱいおぼえました。ポテトチップス、キャラメル、ビスケットやクッキー

などです。しばらくすると、キキと二二は食べ物を与える車、くれない車の区別が段々つくようになりました。一番よくくれるのが小さな子ども乗った車です。こんな車はキキたちの姿を見つけると、写真をとるためにほとんどが止まりました。その時に食べ物も投げてくれることが多かった

のです。反対になにもくれないのがたくさん荷物を積んだダンプカーやタンクローリーなど大きな車です。

こんな車は止まってくれないし、それどころかキキたちが道路わきにいてもよけてくれないのでとても危ないのです。

自転車で乗った人々には2とお

りあります。女の子たちは子ども連れの家族と同じように写真をと

りながら食べ物を与えることが多いのですが、男の子たちには気をつけなければなりません。食べ物くれそ

うなそぶりをするので近寄つて行くといきなり石を投げつけてきたり、自転車で追つてくることもあるのです。

ちよつどこの頃キキたち一家は1

回目の引越をしました。キタキツネはあちこちに巣を持つていてときどき引越をするのです。今度引越をした場所は、キキたちが生まれる前にお父さんとお母さんが

住んでいたところで、道路わきの側溝より広くて静かなおうちでした。

引越をしてしばらくするとお父さんがいなくなりました。キタキツネのお父さんは子どもたちが少し大きくなると、あとはお母さんにま

かせて旅にでるのです。キキと二二はしばらくのあいださびしくてさびしくてしかたありませんでした。

(12月号へつづく)

